

62

黄疸出血性レプトスピラの発見により、 ノーベル賞候補に推薦された井戸 泰(1881-1919)

佐藤 裕

誠心会井上病院外科

井戸 泰(いど ゆたか)は岡山県勝田郡奈義町出身で、福岡医科大学の第二回卒業生(1908)である。同級生には同じく稲田の教え子で、後に九州大学に第三内科を興して初代教授となった小野寺直助がいる。師の稲田龍吉は名古屋の出身。明治33年(1900)に東大を卒業すると、1903年に新設される福岡医科大学の内科学教授になるべく、ドイツ留学を命じられてLeube(胃腸病学)、Romberg(内科学)やHofmeister(蛋白化学)のもとで学んだ後、明治38年(1905)に京都帝国大学福岡医科大学の内科学教授に就任した。稲田は就任当初より、筑豊の炭坑地域に多発する黄疸と発熱を主徴とする疾患(留学中にドイツで遭遇した“ワイル氏病”を念頭においていたと推測される)に着目し、教室をあげて精力的に研究に取り組んだ。すなわち、内科病棟にワイル氏病と疑わしき患者が入院すると担当医が、採取した患者血液を実験動物に接種し、その後解剖して血液塗抹標本や臓器プレパラートを検鏡するという作業を続けたのであるが、その中心が井戸 泰であった。

大正4年(1915)1月、九州帝国大学医科大学内科稲田龍吉教授が、助教授の井戸 泰との連名で第54回九州帝国大学医科大学集談会において、「ワイル氏病病原スピロヘータ(一新種)確定に関する予報」と題した発表を行なった。これが記念すべき「ワイル氏病病原体(後の“黄疸出血性レプトスピラ”)発見」の第一報である。次いで同年2月に、東京医事新誌(第一九〇八号:大正四年二月十三日 第二土曜日発行)誌上に、同じく稲田と井戸の連名で「ワイル氏病病原体一新種スピロヘータ発見概括報告」を発表したが、あくまで和文での国内発表に留まっていた。

そこで、同年の9月ちょうど帰国していた野口英世が「日本での稲田と井戸によるワイル氏病病原体発見」の報を、師であるロックフェラー研究所長のフレクスナーに書簡で報告し、さらに東京の伝染病研究所の宮島幹之助もフレクスナー宛てに「ワイル氏病病原体発見についての稲田らの論文を、J. Experimental Medicine誌に掲載する」ように依頼する書簡を出したのである。これを受けて、1915年の同誌に「THE ETIOLOGY, MODE OF INFECTION, AND SPECIFIC THERAPY OF WEIL'S DISEASE (SPIROCHAETOSIS ICTERHEMORRHAGICA)」が掲載された。この論文発表により、後に繰り広げられるドイツのUhlenhuth(ウーレンフート)らとのワイル氏病病原体発見の優先権争いにおいて、稲田らが優位に立つことになった。なお大正7年(1918)に、スピロヘータ研究の第一人者であった野口英世がその形態学的特徴から、「lepto=小さい:spira=らせん状」という意味で「Leptospira icterohemorrhagiae」と命名したことにより、正式名が「スピロヘータ」から「黄疸出血性レプトスピラ」に変更されて、今日に至っている。

大正7年(1918)、井戸 泰は東京帝大に転出した稲田教授の後継者として、九州帝大の第一内科教授となった。しかし、稲田とともにノーベル医学生理学賞候補に推薦された大正8年(1919)に、京都への学会出張中に“流感(日本ではいわゆる“大正かぜ”で38万人余の、世界的には“スペイン風邪”で数千万人の死者を出した)”に罹り、さらに腸チフスを併発して急逝したため、ノーベル医学生理学賞受賞という栄誉に浴することはできなかったのである。

現在、井戸の生まれ故郷である岡山県勝田郡奈義町は、町文化センター内に特設コーナーを設けて、急逝した井戸 泰の偉業を讃えて、「郷土の偉人」として顕彰している。